



雷火と共に
サヨナラ



ヤマダヒフミ

何も言いたくはないぜ。俺は魂を失ったんだ。
もし、世界が真逆さまに落ちているとしても、俺は真先に地上に激突するだろうさ。俺は誰よりも、落下のスピードが早いんだ。あらゆる重力の規則を破って。
あんたがなにものであろうと、俺の破滅は止められないさ。・・・あんたが金持ちでも、貧乏人でも・・・たとえ、人間でないにしても、な。

これを読んで、笑っている、そのあんた。・・・大いに笑うがいいぜ。俺は、自分が笑われる事は嫌いじゃない。・・・そうやって、みんな、動物園をぐるぐるまわって、檻の中の存在——つまり、俺を高笑いして、そうして、一人で去っていくんだ。・・・勝手にしな。俺達はみんな、神という馬鹿野郎が作った動物園の檻の中の、一匹の動物に過ぎないんだ。

・・・パソコンの電源を消して、そのモニターに写る自分の顔をよく眺めてみな。
・・・そして、それが、モニターの中の、無数の顔と同じだという事を悟るんだ。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・お前は一体、誰だ？

1

これは俺の物語だ。・・・誰が何と言おうと、俺の物語だ。たとえ、地面にたたきつけられ、唾を吐きつけられたって、やっぱりその、石ころみたいな奴が、俺自身だ。

世間には、色々な物語が転がっているが、俺は全部偽物の物語だと踏んでいる。全ては、架空の空想の物語と、そして、もう一つは、瑣末な現実を取り上げた物語にすぎない。俺達はみんな、泥土を見るか、天国を見るかのどちらかの選択肢しか持っていない。・・・もう目は腐って、手も、体もびたりと固まって、動かない。だが、脳みそだけが動いて、そして、この世界の、その無数の脳みそ達はみんな、自分の見たい夢を見せてくれる、そんな媒体を探しまわって、今日もキーボードのエンターキーを叩いてるにすぎない。

彼らに、無数の物語が供給される。あらゆる映像、画像、言葉、音をもって、それは伝えられる。俺達はみんな、檻籠の中に入って、勝手な夢を見る。そして、夢を破る人間に対しては、激怒し、そいつを、また別の小さな檻の中に入れる。まるで、泣きじゃくる赤子のように。

だから、この世界は、小さな劇場にすぎない。そして、そこで行われる、涙も笑いも意図的に用意された、一つの程度の低い芝居でしかない。世界は、見る者と見られる者と共に二分される。観客は、演者に容赦無い檄と、声援を送る。演者は、楽屋でやれやれと観客達を罵りながらも、結局は、観客達の望む、程度の低い芝居を演じる。

俺もまた、この芝居の中のひとりだった。俺の席はいつも端だった。そして、自分が演じたり、下手な役者共の運動を見ている内に、俺はこの劇場にも、そして俺自身にも、心底うんざりした。・・・それで、俺は、この劇場を去ったのだ。

かつて、シェイクスピアが、「この世界は一つの芝居にすぎない」と言った。彼の目に、この世界は一幕の芝居に見えていた。彼には、あらゆる人間の悲喜こもごもが、偽善もまた善と同様の価値をもって見えていた。だから、彼の視点——その精神は、すでにこの地球の劇芝居を既に遠く超えていた。・・・そして、それを馬鹿な連中が批判したり賞賛したりしたにすぎない・・・。それはあたかも、蟻んこが人間の脚に向かって、土をこねて投げるかごとくだった。

馬鹿共の事を言っている、仕方ない。・・・なにせ、その中でも、俺はとびきりの馬鹿なのだからな。

・・・はっきり言って、俺には、自殺した世の人間が羨ましい。・・・この間、まだ小学生の子供が自殺したというニュースを聞いた。世の識者と、善良ぶった連中は、さぞ胸を痛め、また、その「責任」の相手に怒号を上げたのかもしれないが、俺が思ったのは、「ああ、こんなくだらない世界から早く去れて良かったな。良き魂よ、安らかに

眠れ」という、ただそれだけの事だ。

みんなが忘れていた事を、俺は、はっきりと思い出させてあげよう。それは、自殺者というものの観念と価値についてだ。・・・人々は、自殺者というものが哀れな、かわいそうなものだと思いつけているが、さて、それは、片方からの見方にすぎない。全ての自殺者から、俺達のような生きている人間を見れば、俺達の方が、生というこの世でもっともくだらないものに拘泥している、瑣末な、憐れむべき存在に見えているのだ。

俺達は哀れんでいるフリをして、いつも自己弁護しているにすぎない。俺達にとって、自殺者が鬱陶しいのは、彼らが、「死」という無言の言葉で、俺達の馬鹿らしい生を否定しているからだ。その事が、いつも俺達の鋭敏な鼻には臭ってたまらないのだ。

さて、俺は世の中の連中の神経を逆撫でした所で、自分の物語に戻ろう。・・・自然はやがて元に帰って来るべき所に帰ってくるだろう。・・・これはゲートの言葉だ。こうした言葉というのは、自然を知るために長い時を経た人間にしか吐けない言葉だと、俺は思う。初期のゲートのように、激しい情熱と火のような魂と共に、坂を転がっている時には、そう言うにはまだ、時間が足りなかったはずだ。・・・さて、俺にとっては・・・俺は、自然を見る前に、とっと、この大地に、自然に帰りたく願っているものだ。

ここに一つの刃物がある。さて、これをズブリとやれば俺は死ぬ。俺はそれを望んでいる。なのに、俺はそれをできない。いや、それを、やらない。怖いからか？・・・いや、どうやら、そうでもないらしい。この事については、さんざん考えたので、次に述べておこう。

俺がこんな風に自殺者を羨ましく思いながらも、自殺できないのには一つの哲学——というより、一つの「哲学の発見」のようなものがある。・・・そんな大したものじゃないがな。

つまり、こういう事だ。実際に、俺が刃物を体に突き立てるという事と、死という抽象的な観念というものとは、それはまた別物だという事だ。・・・俺は、今のような冗談事ではなく、本気で自殺しようと思った事が、二度ほどある。・・・そして、そのどちらも、くだらない現実や、つまらない人間に出会って、文字通り糞のように「打ちのめされた」後だった。

その時、俺はアルバイトの帰りで、俺は帰りの駅のホームに立っていた。俺は、打ちひしがれていた。ただただ、打ちひしがれていた。俺はその時、ヘッドフォンで音楽を聞いていた。その曲が何かは覚えていないが、とにかく激しいロック曲だった。・・・やがて、俺が乗るべき電車が、滑りこむように、ホームにやってきた。それに乗れば、家に帰れる・・・。だが、俺は帰りたくなかった。もう嫌だった。で、ふいと、その電車に轢かれる事を思いついた。

・・・いや、実際には、そんな風に、頭で考えて、思いついたわけじゃない。実際には、見えたんだ。見えたんだよ。俺が、今いると所を抜けだして、その列車に飛び込む、そんな自分の姿が、俺の目にはっきりと見えたんだ。その、映像が。

だが、俺は咄嗟に——「やめよう」と思った。・・・別に生への希望が湧いたわけじゃない。ただ、何となく、そう決めたんだ。俺は。

電車はホームにやってきて、俺は、死んだような心地で、その列車に乗り込んだ。もう何も考えてはいなかった。心臓は激しく動悸していたが、その時には、全て、終わっていた。

その時に気づいた事は——死というのは、俺が自殺する行為とは、また別物の何かだという事だ。うまくいえないが——俺達には、本来、生への希望も、死への憧憬もないはずだ。そのはずだろう？・・・あるのは、「生まれた」という事実だけだ。そして、もうひとつあるのは、「死」という観念であり、死にまつわる、「無」という世界観だ。

だが、俺が死んだ所で、俺が無に帰すというの、至極、疑わしい事だ。ただ、全てが中断されるに過ぎない。世の中の連中は、好き勝手に、俺の死に、都合の良い解釈を被せて、それでおしまいだ。全ては、元のままだ。

俺が本当に望んでいる「死」という無の存在は、おそらく、現実的な卑俗な死とは違うあるものだ。それは無だが、純粋な無など、この世に、存在する事は許されていまい。俺はその当時、そんな事を素早く回転する頭で考えたわけじゃないが——だが、とにかく、実際の死と、俺の脳内の死とのズレに、気づいたのだ。

それが言い訳になるのか、知らないが、そうした事を経たために、今、俺はこうしてこのくそったれな文章を書いているというわけだ。

2

俺には自分の物語がある、と最初に言った。・・・だが、そんなものはないのかもしれない。・・・いや、多分、ないのだろう。現在の人間には、あらゆる物語が不在だ。試しに、早朝の、すし詰めで会社に送り込まれるサラリーマン達の姿を見てみな。・・・彼らはみんな、同じ顔と同じ服装をして、別々のバラバラの事を考えている。・・・だが、その全体像を俯瞰で見ると、蟻の生態と何ら変わらないに違いない。・・・俺達は人間ではないし(絶えず、世界から「人間でないこと」を求められている)、俺達はただ世界の手足として、ただ蠢いて運動しているにすぎない。ヒューマニズムという言葉が、聞いて、呆れる。顔面を蒼白にして、声を荒げて、自分達の権利を猿のように叫ぶのが、人間的という事なのか。それが文化とかいうやつか。日曜日には、家族サービスとやらの倦怠をくぐり、そして、お気に入りの政治家に投票し、そうして、平日には、頭を空っぽにして働く事——身を粉にして——それが尊い事だと、人は言う。なら、俺は問う。そこのどこに人間がいるのか。・・・俺はね、思うんだよ。あの、オウムサリン事件のような凶悪な事件は、俺達の非人間性に対抗しようとした、もう一つの非人間性じゃないのか、ってね。うんざりなんだよ。実際の所。

君ら、足元を見てみろよ。君達が殺した屍で一杯だぜ。君達——いや、俺達は、それにコンクリを敷いて、見かけだけは綺麗にしたのだが。

今更、何も言う事はない。次の議題に移ろうか。

次の議題はこの世界の享楽についてだ。友達、家族、恋人がいる、それから年収、仕事の条件・・・まあ、そうした事で世界は埋めつくされている。まあ、三十年後には、全然違う風景になっているのに違いないが。

そういう無意味な価値観が蔓延しているのは、何故だと思う？・・・友達がいる、恋人がいる、家族と仲睦まじい。・・・さて、テレビでは、お笑い芸人とモデルだけが、それぞれの地位を保って、それぞれのダンスを踊っている。それを僕達平凡人は、ああ、あそこに何かあるんだろう、夢と光輝が詰まっているに違いない、と考える。だが、そこには実際は、何もない。彼等の背景には何もない。彼等は、人間の形をしたハリボテだ。裏を見せるな！・・・裏は、存在しないからさ。

あらゆる夢を詰め込んだ映像を、僕達は見る。それはかつて、宗教とイデオロギーだったかもしれない。今はね・・・なんだろう？・・・生活？ライフスタイル？・・・生きる事そのものが、幻想にまみれている為に、かつてよりもずっと、僕達はある意味で宗教的に生きている。だが、宗教ほど、荘厳で厳かでもなければ、残酷でもないが。・・・僕達は、僕達の夢を見た。自分達に与える、一つの夢の中を、僕達は今、生きている。まさしく、毎日が夢の中だ。そして、一番、夢にはまりこんだ者が、「これが現実だ！」と勝どきをあげる。・・・うるせえよ。

見ているものは夢だ。失ったものは現実だ。現実と夢に挟まれて、右往左往しているなら、まだいい。・・・だが、そうじゃない。俺達は夢の残骸を掴んで、これが「現実」だと叫んでいる猿共だ。・・・誰よりも、自分達を人間だと信じているくせに、やっている事、頭にあるのはセックスと金。幸福？・・・笑わせるよ。幸福というものにまつわる、イメージーションの貧困をしてみなよ。風の音が聞こえず、花の美しさも、月の影も見られない俺達が、一体、どんな幸福を手に入れるっていうんだ。幸福を感じる心が欠けている所に、一体、どんな刺激が似合うっていうんだ？・・・全く、笑わせるよ。俺達は天国を手に入れたら、とたんに、次のように言うだろうよ。「やっぱり、地獄の方が良かった。あそこは何にしても、色々なアトラクションが、刺激があった」って。

もうこれ以上言うのはやめようか。馬鹿馬鹿らしいから。・・・しかし、こんな馬鹿らしい事しか、僕に言う事が残されていないのも、また、事実らしい。

全ては嘘だし、全ては幻影だ。俺達は幻影を捕まえて、「これが現実だ！」と叫んで

、威張っている馬鹿者だ。・・・俺が思い出すのは、マトリックスという映画だ。・・・あの映画では、俺達の脳髓に妙な管のようなものがつながっていて、そして、それによって、俺達は共同幻想的な夢を見続けていた。あの光景を、子供の頃の俺達はフィクションとして受け取ったのだが、だが、実際に、俺達はそのシステムを既に構築しおえたと言っているじゃないか。自分達だけが、姿を隠しながらも、王になれる――そんな幻想を抱けるシステムが、こうしてもうできているじゃないか。

インターネットというのは全く、面白い媒体だと、俺も思う。そこでは、誰もが無名だ。俺達には顔がない。表情がない。あるのは偽の映像と音と言葉だけ。そして、この偽物の音と言葉と映像に引き連れられて、俺達はどこまで行くか。

・・・俺達は嘘をつく事を覚えてたんだ。・・・子供の頃からの英才教育の賜物ってわけさ。・・・最近では、大人が嘘をつくのが当たり前になったんで、子供もまた同様の嘘について、悪びれない。子供の世界にだけ、いじめがあるわけじゃない。大人の世界のいじめは、子供のそれよりずっとひどいのだが、いつだって、俺達はそれに正義とかアクシデントとか、・・・そんな気はなかった、とかさ、みんなが好き勝手な言い分をつけて、それを見まいとしているだけだ。・・・俺達が、間違っただけと選択によって、この社会の外に押し出した様々な物事と人を、少しは、思い出してみなよ。・・・まあ、君らにとっては、悪いのはいつもメディアとか報道する人間とかで、君達はいつても、他人をなじり、非難しているくせに、君達は「だまされただけ」なので、少しも悪くはない、という理屈を取って逃げるのだが。

俺は、余計な事を言い過ぎているようだ。・・・こんな事を言い続けていたら、誰かに暗殺されるかもしれないな。・・・いや、ほんとに。でもさ、もう、うんざりなわけだ。この世のたわごとには、付き合ってもらえんよ。

正義は嘘に化け、嘘は正義に化ける。どれもこれもよくできた戯言だ。この世界全部が、よくできた嘘だとしても、俺は少しも驚かない。この世界では、一番、非人間的な人間が、一番人間として優れていると、される。顔面硬直したインテリか、それとも正義の鉄槌を下せる犯罪者のどちらか。・・・どちらもヒーローなんだよ。この虚飾の世界の中では。

一番、嘘をうまくついた奴が一等賞、そんな世の中に、俺達は生きている。・・・俺が大学生の頃を思い出すよ。俺達の、くそったれな大学連中の中で、一番、内定が多く、また最も安定していると目されている優良企業に就職したのは、その中でも、一番のぺてん師だった。誰もが鼻持ちならないと、思わず、鼻をつまみたくなるような、嘘つきが、最高の嘘をついたってわけだ。・・・そいつは、正々堂々と次のように語っていたよ。「就活なんて、要領なんだよ。嘘だろうが、それっぽい事言ったやつが勝ち。・・・でも、俺はちゃんと細かいストーリーを作って、突っ込まれても大丈夫なように鍛えていったぜ。そこが、お前ら、ほんくらとの違いだ。」・・・不肖、ほんくらがその言葉に答えさせてもらいますがね。せいぜい、その最高のライフを楽しんでくれ。是非、大いに。そして、もっと、人生観を磨いて、齢八十に至ったら、次の言葉を掛け軸にして、贅沢な床の間にでも、かけてもらいたい。「人生とは嘘なり。最高の嘘つきが、最高の人生を得る」と。

俺は真実なんて、どうだっていいのかもしれない。モンテーニュも、パスカルも糞食らえだ。・・・だがな、やはり、彼等の誠実さは、俺の魂に染み入らざるをえないのだ。ランボーの、全てを軽蔑した風采は、俺の魂を鋭く貫き、刺し通す。だから、俺は彼等から逃げられないし、俺自身からも逃げられない。そして、誠実さの先に真実が待っているという事も、やはり、否定できなくなるんだ。

そんな事はどうだっていいって？・・・全く、現実を見ろ、だって？・・・お前は、甘ちゃんだってか？・・・中学生の、青年の拙い主張に過ぎないって言うのか？

だったら、聞こう。そう言っているお前の人生とは何だ。・・・少しは、パソコンの画面の前から離れて、友人、恋人、会社、学校から離れて、生の自分を鏡で見てみな。弱く、脆い自分自身というものを、もう一度、直視してみなよ。・・・そこに、何が映るか。さて、君は、明日死ぬとして、一体、何を思うか？。君は君が愛したものを思い返し、そこに、満足を感じるか？・・・その日暮しに、その日、その日に、いつも、未来と過去に板挟みにされ、幻想でうめつくされた君の人生に、死という明らかな照明を当ててみなよ。そこに何が映る？空っぽか？それとも実質ある、なにものかが映るか？

・ ・ ・空っぽだろう？ ・ ・ ・嘘つくなよ。今、この俺の目の前で、嘘ついたって仕方ない。世間の連中に対して、嘘は大いに有効だが、今の俺に君の嘘は通用しない。 ・ ・ ・どこまでも、通用しない。君は、空っぽだ。抜け殻だ。何もない。全て、だ。何一つ、ない。君が愛した思い出、愛された思い出 ・ ・ ・ ・ ・それらは全て、現実という闇に紛れて、もう目に見えないはずだ。死という強い光の元に、全ては消滅してしまった。 ・ ・ ・つまり、それだけはかなく、脆いものだったんだ。俺達が掴んでいたのは、藁に過ぎなかった、という事が今、はっきりとわかるはずだ。

そうだ、藁だ。全ては幻想だ。 ・ ・ ・ ・ ・おいおい、アイドルに思いいれたりするなよ。恥ずかしいじゃないか、その年で。 ・ ・ ・いや、俺は例えば、君がアイドルと付き合い日が永遠に来ないなどと、月並みな批判をしたいんじゃない。 ・ ・ ・たとえ、君が、アイドルと付き合い合ったところで、その全てが全部嘘だという事を、俺は言いたいだけなんだよ。その挙動、動作、言葉遣い、息遣い、全てが嘘でできている。だが、嘘を楽しむ事も大事だ ― ― ― ― ももちろん、そうさ。それなら、俺はもう君を止めたりはしない。君は、大いに幻想に、嘘に酔い給え。美しい花びらをみたまえ。だが、それらの全てが嘘だという事は、絶対忘れては駄目だぜ。アイドルが、ぼろを出した所で、笑って許してやれ。 ・ ・ ・彼らは、嘘のつき方をちょっとしくじっただけだってね。

さて、ここで世界一くだらないアイドル論はおしまいにしよう。もう、おしまい。店じまい。全ては嘘。空っぽだ。さて、そして、その次には、何が残るんだ？

3

・ ・ ・何にも残らないさ。俺は俺を知っている。俺は、世界一空っぽな人間だ。今更、言う事でもないが、この世界は空っぽで、もうどこにも物語は残っていない。もう、うんざりだ。

・ ・ ・それでも、物語はあるのか？ ・ ・ ・。「無」からの、物語の出立というやつは？

例えば、俺が大手の大企業に入ろうとすれば、そこに待っているのは物語じゃない。無だ。無。今更、言う事もないが ― ― ― ― いいさ、君は君が作り上げた幸福と家族に浸っていたまえ。四半期ごとの、黒字の収支表を眺めていたまえ。俺は ― ― ― 空を見るさ。全てを失った人間だけに見える空というものが、この世にはあるのさ。

不動産屋と画家じゃ、同じ光景を見たとしても、その見方が全く違うのだ、という話があったな。俺と君との、物の見方は、多分、違うはずだ。君にとって、全ては死物だ。 ・ ・ ・君は、何時丁度に目的地に着く事だけを考えている。だが、俺には目的地がない。 ― ― ― だから、そこに映るものは俺にとっての、全てだ。そこではあるがままのものが現れる。君にとっては、全ては、君が踏み越えて行く障害にすぎないのだろう。俺も、家族も、友人も、全て。スキル？ ・ ・ ・おおいにつけるがいい。そして、幸福になるがいい。ゴールを目指して、マラソンをせいぜい走るがいい。だが、それが、君が定めたゴールなのか、それとも誰かに強制されたゴールなのか、その事実について、君の魂だけは知っているはずだ。たとえ、生涯に渡って、君の魂が君自身にその秘密を打ち明ける事はないにしてもね。

ハハハ。 ・ ・ ・これで、わかったろう？ ・ ・ ・俺は馬鹿なんだよ。馬鹿。生きる為だけなら、利口になるのが一番だ。だがな、俺は利口な奴の魂を覗きたいとは思わない。そいつは、大抵、自らの魂を黙殺する事によって、利口なのだからな。頭脳。頭脳。 ・ ・ ・全く、頭脳万歳な世の中だよ。本当に、そう思わないか。

あらゆる企業の収支表から始まり、俺達の身に溢れている言語、恋人同士の身のこなしから、野球やサッカーにおけるデータの偏重に至るまで ・ ・ ・全く、全てが、頭脳万歳の世の中なんだよ。頭だけが全てだ。 ・ ・ ・それはいい事か？ ・ ・ ・もちろん、俺もそう思う。そうして、感覚と神経の抜けた青白いインテリと、それに追従する馬鹿共が、勝手な勝利論をのたまえば、それで事は無事終わりりと ・ ・ ・ ・ ・全く、めでたい事だねえ。

わかるか。俺達の頭脳に何が宿っているか。お茶を一杯飲むにも、その効能を計算している。恋人と愛撫するにも、その幸福をいちいち数値で図りつつ、何か言われれば、その自称アーティストのCD売上枚数を吐けば、それで反論になったと信じている。

・・・そして、その一方で腐り果てているのが、感覚だ。たとえば、俺が俺の好きな、俺が本物だと、また、唯一だと信じているアーティストを、敵対者から、擁護するとする。その時の、俺の論拠はたった一つだ。「俺が素晴らしいと感じたから。」・・・ちなみに、ここでついでに言うとおくと、「感じた」という点が非常に大事な点だ。俺は思ったんじゃない。感じたんだ。頭じゃない。心なんだ。

こんな初歩の算数も、頭脳偏重の俺達にはわからなくなっている。・・・全く、俺も、優等生に生まれれば、良かったよ。世界が全て、数に還元されて、さぞすつきりするだろう。俺が画家なら、キャンバスに数字を打ち込んで、それでおしまいだ。

全く、また、俺は馬鹿な事を言っているな。・・・ったく、よお。困ったもんだ、俺も。

だが、馬鹿のついでに、さっきの話の続けさせてもらおう。・・・俺にとって、俺が「感じた」という事実は非常に大事なものであるし、ある意味で絶対的なものでもある。だが、他人はもちろん、俺の感覚を軽蔑する。「それは君が勝手にそう思ったにすぎない。君の主観で、物事を決めるな。」・・・他人の主観を侮る奴は、自分の主観も信用できない。こんな事は初歩の初歩の哲学に属する。今更、言うまでもない事だ。

さて、こうして、誰もが、感覚と主観を否定し、排する。・・・すると、客観性と、見事な科学性が残る。・・・残ると思うだろう？・・・俺も、中学生くらいまでは、そんな宗教を信じていたかもしれないな。ところが、事はそううまくいかない。

何故ならば、あらゆる客観性は、主観性から生まれ、発現しているからだ。目が見えなければ、月の直径を測る事は、我々には永遠にできなかったに違いない。だが、俺達は、必ず、次のように考える。・・・俺達が目をつむった所で、月の直径も、そこにある月の姿も変わるまい、と。だから、たとえ、俺達が「存在しなくとも」、やはり、月はそこにある。

だが、その、「そこにある」という認識の方法自体が、主観的な把握方法から生まれた胚子なのだ。・・・たえ、俺達が目をつぶっても、俺達が存在しなくなると仮定しようが、俺達は、俺達流の認識方法を改める事はできない。客観が主観を否定し切る事は、決してできないのだ。また、その逆も、同じであるように。

あるいは、こんな哲学めいた事は省いて、別の事を言おう。例えば、ここに、国民的作家である所の夏目漱石という人物がいる。彼は、この日本というしみつたれた国のしみつたれた国民達によって、実に多くの回数、繰り返し、読まれ、評論された作家だ。彼の名を知らない人間は少数だといっているくらい、普遍的、国民的作家だ。・・・

この事に異存はないだろう。

だが、彼は、誰よりも、自分は変人だという意識を持っていた。・・・そして、そうした意識を持って、創作活動を行っていた。・・・ところで、この変人が、どうして、国民的かつ普遍的作家になる事ができたのか。

この魂の謎だけは、君には永遠に解ける事はできないだろう。解けないからこそ、君は君なのだ。・・・こんな事は、ただの悪口か？・・・多分、そうだろう。だが、もう少し、俺も言わせてもらおう。

俺達はみんな、隣人には注意を払わない。もし、電車の隣に、夏目漱石級の人物がいたところで、俺達はその事に決して気が付かないし、俺達の職場に、後年、その名を知られる天才がいたところで、俺達はその人間の内部について、少しも思い至らない。そして、そいつは多分、その職場では、変人である事を強いられているのかもしれない。

俺達の持っている凡庸な目というのは、不思議な遠近感を持っている。近くものは気が付かないが、遠くものだけははっきり見えてくる。・・・ここで、不思議な事が起こるのだ。俺達は、みんなが騒ぎ、はやし立てるものに対しては、高い点数をつけるのだが、自分が本当に良いと思っている、あるいはそう感じたものに対しては、その自分の内部の感情を黙殺し、低い点をつけてしまう。

これが一般的感情なのかもしれないな。・・・もし、これが、一般性なら、糞食らえだが。そして、これが所詮は、俺達の情けない客観性の姿ではないか。俺達は客観性と言う。固い現実、と言う。だが、それはそうではない。そう見えるものだ。俺達は花を見はしない。花の噂だけを見ている。美しい他人を見て、そいつの評判と共に、そいつを見る。素直な目で、何かを見る事はできない。その背後には、全て、客観的と称されたあらゆる情報が最初にインプットされている。そこで、俺達は目をつぶる。自分の心の目をつぶる。そして、その時、新たな目を開ける。・・・他人の目だ。自分ではない、誰かの目だ。・・・そして、この誰かの目ほど、あいまいなあやふやなものはないが、これは多数決の原理によって正当化される。何が正しいか、誰にも分からないために

、みんなが一人一票を持って、どれかに適当に投票する。すると、票が集まる。・・・一等賞さえ取ってしまえば、既成事実のできあがりだ。既成事実ができあがれば、それを宣伝文句に、さらに、俺達から金を稼ぎあげようって方針さ。奴らは。・・・さて

。こんな馬鹿らしい話は、さすがに、もうやめようか。何だか、俺も、うんざりしてきたよ。・・・全くのところだ。君らは自分を失って、他人をとるが、みんなが互いに、他人という幻想に頼る為に、その幻像が崩れてしまえば、それでおしまいだ。そして、幻の宿命は、消え去るという事さ。それ以外にはない。

4

客観性云々という話はすでに優れた作家——例えば、ジョージ・オーウェルのような人が、ディストピア的世界観で、その空虚さを描いたが、その問題は今も終わってはいない。・・・むしろ、今ももっとも濃厚な問題と断言していいだろう。

虚構の、空虚な世界は、空虚な連中によって作られる。俺はな・・・見るんだよ。この都会で、空虚になりながら、そして、全くキチ〇イ的な頭脳をしているにも関わらず、自分は一つの熱情を持っていると信じている輩達を。彼等はプラカードを持つ。彼等はビラを配る。彼はネット上に動画をあげ、掲示板に書き込む。自分達は正義だ。間違っていない。大人を敬え。私達の権利を守れ。・・・そうやって、非人間化して行って、誰かを殴っても、その痛みだけは永久に知る事がない。自身の神経が存在しない人間に、他人の神経が理解できるはずがない。

永遠に、分厚い法律書をめくって、他人をさばいていけば、便利だ。もちろん、俺達にも、そんな便利なツールは必要だ。だが、人間が道具になる必要はない。・・・だが、しかし、俺が周囲に見る人間は、みんな道具みたいな表情をしている。そして、彼等は俺にこう言う。「お前も道具になれよ。それが、一番人間としてすべき事だ。余計な事は考えるな。」

一つ、聞こう。君達は余計な事を考えてこなかった。そして、余計な事を考えてこなかったツケが、年を食った自分に回ってきた。君はいまさらのように、熱情のカスを手に入れて、なにものかを主張しようとする。君は、自分で自分を破棄したツケとして、今更のように自己主張しようとする。だが、君という存在はもう既に失われている。君が、最初に捨てたものだ。それは。君には、もう、嘆く事すら許されていない。・・・さて、どうするか。

スローガンを持つか、組合に入るか、ネットで知り合って、ビラを配るか。どれでもござれだ。だが、いくらそんな事をしたところで、失われた君は戻ってこない。捨てたの自分自身だ。これを拾い上げるには、これまでの自分の道程——つまり、非人間化してきた自分の姿の全てを、全部否定しなければならない。だが、そんな事は、もちろん、人間には不可能な行為と断言していいだろう。そこで君は、借金を払う為に更に借金をする男のように、また一心に駆け出すのだ。人生の半ばを越えて。死から逃走し、自分自身から逃走し、君は一つの純粋なイデオロギーへと、純粋なスローガンへと見事に加工されてゆく。

君は誰だ？・・・もう一度問う。君は誰だ？何者だ？

・・・さて。で、こういう連中が、時勢の不安に乗じて、沢山出てくると、もう世の中はおしまいだ。そして、その時は、丁度、今この時期に当たるようだ。・・・やれやれ、全く嫌な時期に当たったもんだ・・・と、言いたいところだが、いつの時代だって同じようなもんだ。人間ってのはずっと、こうだ。・・・二千年でやった事といえば、ちょっと、外側の装飾を派手にしたぐらいの所で、その中身は相変わらずのままだろう。

俺が神なら一夜の内にこの世界を滅ぼすか？・・・馬鹿言うなよ。俺が神なら、こんな世界を創生した自分を恥じて、この世界と一緒に心中するね。・・・それが、せめてものけじめだ。

全く、笑えるよ。・・・え？・・・所詮、お前の言っている事は、青年の主張だって？・・・中二病の、小さなガキの吠え面にすぎないって？・・・そうかもな。だとしたら、君も俺と同類だな。君は、ただのジジイの繰り言にすぎない。社会に、

現実に敗北し続け、敗北する事だけをその身に染み込ませた爺さん婆さんの繰り言に過ぎない。だから、君は俺達の仲間なんだぜ。・・・知ってたか？

こんな身のない事を言っている、仕方がないな。・・・だが、彼ら正義派の連中は、右に左に揺れ動いて、そうやって前に出てくる。そして、今、丁度、出てきている。彼らが実権を握るのはもう少しのことだろうよ。・・・なにせ、誰もが、自分の不安を捨てようともがいている。簡単に言うと、自分が誰かに襲われるかもしれないという不安を捨てる為に、身近な誰かに襲いかかるようになるのだよ。不安だから。不安だから、そうしたというわけさ。どんなものにも理由がある。・・・どんな殺人鬼も、理路整然と自分を弁護する事が可能だ。

この沈んでゆく船の中、そして、この窒息しそうな船室の中で、君は一体、何を思う？・・・なあ、君は一体、何を考えるんだ。この、腐ったベッドの上で。俺はね、もう考える事なんか無いんだ。外では、バカどもが走りまわって、この船が沈没していく責任を、誰かになすりつけなければいいのか、会議し、そしてその相手を徹底的にしぼるらしい。・・・一言、言っておくよ。この船が沈み始めたのは、誰かの責任じゃない。俺達が、それを誰かの責任だと考え始めた時になって、明白にこの船は沈み始めたんだ。・・・思い出してみなよ。全てを。何かがあるから、不安になるんじゃない。君達が不安から逃げようとした所から、本当の不安が始まった。・・・あんた方は、他人を破壊していきになるかもしれないが、それは実は自分の姿だ・・・という事に、いわば神の慈悲がある。君は反省できる。どこまでも。・・・そう、地獄でな。

でも、まあ、俺は・・・俺？。一体、誰だ？そいつは？俺？俺ってなんだ？・・・そう、まったく。ふざけた事だ。

俺はね、夢を見るんだ。腐ったベッド、淀んだ空気の船室、沈んでいく船の中で、俺は目をつむる。そして、自分の好きな夢を見る。この世の誰よりも、そして何よりも素敵で美しい夢を。どんな富豪にも、王にも叶わなかったし、想像だにできなかった美しい夢を、俺は見る。・・・俺はもはや、現実に対して、一片の関心も抱いていない。だから、夢は現実以上に真実ってわけだ。

そうやって、俺は夢を見るんだ。夢の内容は、明かす事はできない。あるいは、それを明かす時が来るかもな。だが、その時は・・・いや、「その時」の事なんて、どうでもいい。

とにかく、俺は夢を見る。・・・世界は腐って落ちていく。そして、俺は真実という名の幻を抱きながら、この天空へと上昇していく。・・・もし、その途上で神にあら、よろしく言っというてやるよ。君の事を。

5

全てが終われば、もう話す事はない。・・・俺は狸寝入りするだけだ。

だが、全てが終わる時など、俺達には永遠に明示されないに違いない。俺達は、自分の死を見つめる事ができない。・・・これもまた、初歩の哲学だ。たとえ、世界が明日終わろうと、それは俺達には決して認識できない彼方の事象に違いない。だから、俺達がそんな事を考えるのは間違いだ。これは、哲学的誤謬だ。

哲学なんてもうやめよう。・・・馬鹿馬鹿しい。俺は、人間だ。

俺が何を考えようと、何をしようと、どうやらこの世界は沈んでいくらしい。・・・こんな事は、中二的妄想か？・・・まあ、世界が上昇していたって、俺はその波には乗れない人間だが。

結局、俺にとって一番価値があったのは、俺の不幸と孤独だけだったらしい。・・・俺は世間並みの幸福に出会いそうになると、思わず、身構えて、それを遠くに引き離れたもんだ。・・・また、そこに漂った、何だか白痴的な、笑みの表情も気になっていた。

俺は馬鹿野郎らしい。俺は何かを求めていたが、それを現実に見出す事はできなかった。それで、俺はここに戻ってくる。この言葉の群れの中に・・・言葉なんて、くそくらえだ。・・・それは、俺もよく知っている。大学で、あほらしい授業をしこたま受けたからな。

だが、俺が転生するにあたって、この言葉の群れは必要だった。・・・言葉が俺の唯一無二の友人だった。他はいらない。

俺は言葉の花園にしゃがみこんで、そして、青空を見つめている子供にすぎない

んだ。・・・全く。安らぐぜ。現実を離れるという事は、こんなに心地の良いものか。

そうだ。・・・ここが、俺の場所だ。・・・天国にうつろう天使共よ、聞こえるか？・・・今、地上の子である、この俺様は、あんた方の薄綺麗な天国を蹴って、この地獄の針場所——言葉の中をさまよう事を選ぶ。・・・そうだ。この地上で、この地上の全てを手に入れたと自惚れている「勝ち組」、あるいは王の人々よ、俺の声が聞こえているか？・・・俺は自分の孤独に安住する。そこで安らぐ。俺には針のむしろも、もはや、快い。針はついに、俺の魂を貫き通す事はないと、既に知ったからだ。・・・そして、自分こそが不幸の体現者だと信じきっている「負け組」、あるいは精神の貧乏人達よ、聞こえているか？・・・俺は、あんた方のように、嫉妬と攻撃によって、失われた自分を取り戻そうとは決してしないつもりだ。既に失われる事が決まっていた、それが定めだったのに、あんた達は、奪われた事を、誰かのせいだと考えた。・・・俺は、失うべきものを最初に捨てた。残るは陽光・・・。そう、全てを捨て去る事ができれば、水道水の一滴にも神の慈愛を感じる事ができる。・・・そういう事だ。

みんな、聞いているか？・・・俺の下僕であると同時に、主人である者達よ。今、この俺の言葉の意味がたとえ、かけらも分からなくても、俺が少なくとも、俺にとって言うべき事だけは言ったという事だけは、俺にとって、自明だ。・・・そう、ただ、一人俺にとってな。

俺が馬鹿だとして、俺はここにいる。それだけだ。

俺の声はしわがれている。知っているか。

もう、随分、歌を歌ったんだ。喉が枯れるのも当然じゃないか？・・・それでも、まだ歌を歌わなければならぬというのか？。朝が来たら鳴き声を上げる小鳥達のように。・・・一体、何の為に？。

俺は俺の幻影を見る。雷と共に地上に落下していく俺の姿を。・・・俺は落下しながらも、何かをハミングしている。・・・そして、その顔には心底楽しそうな笑顔がほころんで咲いている。サヨウナラ。この世界に、俺は未練はない。俺は、死よりも速い速度で、この世界を横切っていく。・・・サヨナラ。生にしがみつく者達よ。・・・せいぜい、他人を呪うが良い。せいぜい、君達の卑小な幸福とやらを追い詰めるが良い。君達の全ては、君達が作り上げた塔によって、激烈に壊されるであろう事を先に、ここで宣言しておく。サヨウナラ。塔が壊れたら、また会おうぜ。生き残った奴だけでな。ひっそりと。

それまでは、俺は冬眠だ。まあ、会う日まで。

さよなら。